

## 行藏は我に存す

松山義則  
(総長)



卒業生のみなさん。ご卒業をお祝い申し上げます。

同志社で大学時代をおすごしになり、いま社会に旅立たれるときを迎えられました。卒業されるこの時期は、わが国にとっても世界にとっても激動の時代であります。わが国では、政治改革と経済不況とが重要な課題であり、その将来は決して予断を許すものではありません。世界の状況も、東西の対立が消滅して世界平和を夢みられたのもつかの間、南北問題、民族、宗教間の複雑な紛争が各地において頻発するという不安定な事態を生じています。世界の政治、経済、社会は緊張にあふれています。身近かには、みなさんの就職状況も今年はきびしい状態となり、苦勞された方がたも多くありました。雇用調整、雇用不安などという不穏な言葉をも耳にしました。何年かして、あるいは何十年かの後に、卒業されたときを回顧され、その時期をとりまいていた酷しい状況を想起されることでありましょう。

人類の歴史は、決して安定したのではなく、いずれの民族の歴史も、またどの時代も、大きな変動をくりかえします。人類の歴史は、つねによりよい方向にむかって、一方的に進歩の道をすすんでいるのか、あるいは歴史は単なる繰り返しなのか、さらには人類の歴史は退歩をかさねて破滅に向っているかについての判断は、それぞれの思想なり、歴史観、またその人の立場によって異なることでしょう。

同志社の創設者、新島襄先生は、わが国の幕末から明治の中葉にかけて、歴史が大きく変動するただ中に生きました。一八四三（天保一四）年一月、安中藩神田一つ橋の江戸屋敷に生まれましたが、これは明治をむかえる二十五年以前でした。成長するにつれて彼は武士の嫡男としての自分が、封建制のきずなにはばられていることを知りました。たまたまアメリカ人ブリッジマン著の漢訳書「アメリカ合衆国歴史地理」を読む機会を得て、アメリカ合衆国では大統領を選挙でえらぶこと、学校や福祉など民主主義にもとづく社会があることをはじめて知り、日本の現状とてらしあわせて、外国への憧憬に心を燃やしました。そしてまた江戸湾上に浮かぶオランダ軍艦の威容に接したとき、多感の青年の心はゆさぶられ、彼はわが国の将来を憂い、ついに意を決し、禁を破って脱国、アメリカ商船に投じて海外に渡ったのであります。

そのころ、京都では攘夷開国と世論はゆれ動き、尊王佐幕の力関係も日を追って変動していました。新島先生がひとり函館をあとにして日本をはなれた元治元年六月の京都は、三条河原町の池田屋騒動をはじめ、血に血をぬる悲劇の日々でありました。昨日の友は今日の敵であり、昨日の敵は今日の友となる激動のなかで、時代は慶応年間をむかえ、その四年、戊辰戦争が勃発、徳川慶喜は会津藩主、松平容保をともなつて、急據海路をとって江戸に逃走し、徳川幕府の終焉と薩長などの

藩閥抗争を生じました。その激変の渦中には、かぎりない策謀と欺瞞が跳梁し、不信があふれ憎悪は容赦ない殺戮を生みました。

われわれが直面している現状は、幕末の戦乱や、地域紛争のような状態ではありませんが、社会の状況や人と人との対立や不信のメカニズムには共通のものがあり、われわれはそのきびしい事態のなかにいます。みなさんはそれを体験し、覚悟を新しくして社会に向われることでありましょう。人間は幸運によるこびを感じる時もあれば、悲運にせずむこともあります。好調の日もあれば思わぬ落とし穴にはまり込む日もあります。歴史が変動きわまりないように、個人の歴史も決して一本調子ではありません。晴天の朝には風雨の夕がとつてかわることは世の常でありましょう。「禍福はあざなえる縄のごとし」と言われますが、禍いと幸せとは、縄がよりあわされているように、立ちかわり入れかわり変動するのです。われわれは幸福と不幸にみまわれるごとに、一喜一憂して日を重ねることでしょう。幸福には酔い、不幸にはかなしみますが、禍福の是非は歴史が判断するので、われわれは幸、不幸のくりかえしのなかで、それにとらわれがちになりながらも、つねに生きる目標を明確にかかげ、その目標に向って堅実に歩むことこそ大切なことであると思います。

江戸城の開城受け渡しの交渉にあたった勝海舟は、その激動のなかで誠実にことにあたりました。突発する危険と敵味方ともに統制の乱れのあるなかでのことでありました。海舟は自らのこのような体験をこめて、後年、新島没後、同志社を背おって立つ小崎弘道、徳富蘇峯、金森通倫に対して書を送っています。そのなかで、「みなさんは同志社創設のあとの大業を受けてむずかしい仕事に当られることですから、深くものごとを考えて下さい。百難が重りくると覚悟して下さい。わたくしも今まで困難で危険な衝にあたりましたが、誠実に不撓の思いでのりこえてきました。」そしてまた

「ものごとに進んで当ることも、また退くことも、みな自分の責任です。しかしどうように誉められても誇られても、これは他人の言うことであり、自分に関係のないことです。」と述べています。「行藏は我に存す。毀誉は他人の主張、我によらず我に閑せず」とあります。勝海舟は、幕末から明治にかけての激動のとき、敗者の徳川を代表して敗戦の処理にあたりました。江戸城開城によって江戸を戦火から守り、生命を大切にしようという願いを誠実に、また不撓の精神をもって実現させました。敗北者の側にあつて、しかも統制に服さない過激な分子をかかえながらのことでありました。進むことも退くことも、その決断と行動は自分の責任と考え、命をかけての果敢なはたらきでありました。みなさんもこれからそれぞれの人生で、勝海舟と同じような場面に立たれることとなりましょう。そしてその結果が成功することもあれば、とりかえしのつかない不成功に終ることもあるかもしれません。「禍福はあざなえる縄のごとし」であります。しかし、決して倒れることなく、誠実に不撓の精神に生きてほしいと思います。また、他人や世間の批評にまどわされることなく、自己の声に忠実でありたいと思います。

行藏は我に存す。他人の毀誉褒貶は我に閑せず、と言いきった勝海舟には他人の言葉に左右されやすい人間の心に気づいていたのでしょうか。弱さをもつ人間は誰しもが、苦しみのなかで自らを失います。新島先生が神を信じ、永遠の力を求め、神の御業の実現のために働かれましたが、同志社人として卒業生のみなさんが誠実さと不撓の精神をもって、苦難をのりきって下さい。みなさんのご健康とご多幸を祈ります。

## 拘束と誘惑からの自由

岩山太次郎

(大学長)



ご卒業おめでとうございます。

いま、学園生活をおえられる皆さんは、これから新しい、未知の世界へ入ろうとしておられます。その世界での自分の役割を果たそうと胸をふくらませておられることではありません。皆さんの前途には洋々たる世界が広がっています。そこには何本もの道があります。自らの目的に向う道も何本もあるに違いありません。皆さんは常にどの道を選らぶかの選択をさねなければならないはずで、そのときの選択には決して「容易さ」のみを選択の基準にされてはならないと思います。

同志社の創立者新島襄が、一〇年におよぶ滞米生活をおえ、一九七四（明治七）年一〇月九日、アメリカのヴァーモント州ラットランドで開催されたアメリカン・ボードの年次大会で、五〇〇〇ドルにもおよぶ寄附の申し出を受けられたこと、そしてそれが同志社設立の礎になったことは有名

であります。そのとき、新島は、

「私ほもつと申し上げたいのですが、胸がいっぱいで言えませんが。沢山の友人に別れを告げるのはつらいことです。昼間の光の中からあけ方の灰色へと進むことはきびしいことです。しかし私は天上のエルサレムから地上のエルサレムへと下り給うた私の救い主をみならわねばなりません。主に従い、もう泣くことはやめたいと思います。」

新島はこのように語ったと伝えられています。

そのときより四年間、一八七〇（明治三）年七月、新島は二八歳のとき、アーモスト大学を卒業し、帰国後は日本にキリスト教主義の学校を設立することをすでに決意していました。政府の許免を受けず、函館より密出国をしていた彼は、帰国すれば国外脱出の刑を受けるであろうことも覚悟していました。一八七一（明治四）年三月には、ワシントン駐在少弁務使森有礼とボストンで会い、日本政府からのパスポートの発行の幹施方の申し出を受けました。またその翌年五月には、アメリカ風の学校を日本につくり、それを監督しないかとの誘いも受けたのでありますが、パスポートを得るための請願書を書くことも、政府の奨学金を受けることも拒否しました。安易な道の選択により自らの信念をまげることがよしとはしませんでした。新島は“a free Japanese citizen”（一八七一年三月二一日付の手紙）として神よりの務めを果したいと語っています。

新島が学んだアーモスト大学にロバート・フロストという詩人がいました。一九一六年から死亡した一九六三年まで、通算すると三七年間も教師として、あるいはキャンパス在住詩人としてアーモスト大学にいた詩人で、国民詩人として多くのアメリカ人からも親しまれた、今世紀最大の詩人の一人であります。（アーモスト大学はこの詩人を記念し、一九六五年に「フロスト・ライブラリー」

を建てました。)

この詩人に “The Road Not Taken” (「行かなかった径」) という一九一四年の詩があります。紅葉した森に二つの径があった、人は同時に二つの径を歩むことはできません。二本の径はどちらも美しいのですが、人が踏みならした安易な径ではなく、踏みならされていない方を、未知の径をこの詩の主人公は選びました。何年かして選択が誤っていたことが分ったとしても、行かなかった方の径へもどることはできません。この詩は次の二行で結ばれています。

Two roads diverged in a wood, and I ——

I took the one less travelled by,

And that has made all the difference.

かりに自らの選択が、結果として実らなかつたとしても、それはその人にとって、意味のある重要な選択でありました、その人の人生が失敗であつたわけでは決してありません。

新島は敢然と、*“a free Japanese citizen”* 「自由な日本人」の道を選びました。またある手紙には  
こういふ一文もあります。

...it would be my best policy to keep myself free from the snares of the Japanese government.

(一八七二年三月二〇日付の手紙)

「政府の誘惑から自分を自由にするのがわたしの最善の策である」と。これほどまで確信をもって自らの信念にもとづいた選択ができたのは、新島にはすでに彼自身の「政府」(“government”)があつたからです。彼は言います、*“I have already recognized the Sovereign King, the Saviour, as*

---

my lord and government” (同じ手紙)と。

卒業生の皆さん、人間は常に選択をせまられる存在です。そういうとき、どうか自分の拠所どころとなる自らの「政府」(“government”)をもつて下さい。政治が混乱し、経済の先行きが不透明なときほど、「誘惑」は大きいでしょうが、自分の「政府」にもとづいた、胸のはれる選択をされることを希望します。

“To keep free yourself snares.”

皆さんのご健康とご健闘を祈ります。



## 倫理感ある社会人に

児玉実英  
(女子大学長)



卒業していく皆さん方に、一ことメッセーヂを送ります。——  
「倫理感をもった社会人になるように」——これが、そのメッセー  
ジです。

中世イタリアに、こんな話があります。

ヴェネチアの造船所では

いたんだ船の傷を填めるために

冬 瀝青チャンがぐらぐら煮えたぎる。

そのように、火はないが神たくみの工で

下の方に濃い瀝青がぐらぐら煮えたぎり……

チャンというのは、タールのような漆黒のピッチのこと。地獄の暗やみの中で、まっ黒なピッチが沸騰し、不気味なあぶくを浮かべているというのです。じっと目をこらすと、チャンの中に、なに

かうごめいているものが見えます。

ちようど堀の水際で

蛙が脚や体を隠して

鼻面<sup>はなづら</sup>だけを水面に出しているように

いたる所で罪人が鼻面だけを出していた。

(平川祐弘訳)

そこで鼻先だけを出していたのは、生前の「汚職取賄」にあけくれた人たちだったというのです。これは、ダンテの『神曲』からの引用です。ダンテは、当時の人々の実名をあげて、名を書き連ねています。

そのイタリアで、二十世紀、つい最近、大がかりな汚職事件が起こり、多くの政治家や財界人が捕まりました。もしダンテが生きていたなら、まちがいなくこういった人たちも、実名をあげて、地獄の底に落とし、チャンの中に投げこんだことでしょう。

しかしこのような不祥事は、イタリアに限ったことではありません。昨年は日本でも、汚職のニュースがマスコミをにぎわせていました。皆さん方へのお願いは、皆さん方の中から、絶対このようなチャンにほりこまれるような人を出さないようにしてください、ということ。少しくらい愚鈍でもよい、倫理感をもった社会人となってください。新島先生も、「シンセリテイ」が大切といっておられることを忘れないでください。

皆さん方をお願いしたいことは、もう一つあります。それは、さらに積極的に、社会によい貢献をしてほしいということです。難かしことではありません。

カリフォルニアの日系二世の作家に、ヨシコ・ウチダという人がいます。（この人は、アメリカで有名な同志社関係者のお嬢さんですが）、その作品に、「カンダおじさんの黒ねこ」という短篇小説があります。それは、十歳くらいの少女が、母親のいいつけで、近所のカンダおじさんに食べものを運んであげているうち、だんだん親しくなり、いろいろなことを学び、その家の黒ねこもなつき、成長していく物語です。

小さなことでもよい、人に親切に、人の気持を大事にする精神——これが大切です。

皆さん方は、入試を突破し、同志社で学生生活を送り、教養を身につけ、多少専門の勉強もしてきました。そして、この度は、卒業していこうとしておられます。おめでとう。しかし自分の力だけで、ここまで来たと思ったら大まちがいです。近所の人たちや両親、家族、友人、先輩、そして先生方など、多くの人たちのおかげで、今日まで生きてこられたのです。「人さまのおかげ」、という感謝の気持——これが大切です。

卒業後は、カレッジ・ソングにあるように社会のため、人のため、母校のため、役立つ人間になつてほしいと思います。がんばってください。